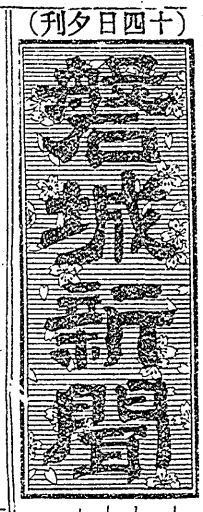
（十四日夕刊）

休刊　大祭日　第一・第三日曜
定價　一部二錢郵稅共　一ケ月六十錢　十五錢
廣告料　賣行六十錢指定廿錢增
賣行數　盛況　前輩
福島縣平町田町十六番地
發行所　聲城新聞社
電話五六四番



映畫

「唐人お吉」その他（二）

シネアストの日記!!

島田春夫

さて、再び何がこの映畫をさうさせたか、私は敢然として斷言する「それは文藝作品の映畫化であつたら——」即ち、現在日本の映畫界に於ては、藤森成吉原作「何が彼女をさうさせたか」は、その文藝作品の映畫化たることに於て、菊地寛原作「新女性鑑」と何等異る所はないのである。然も映畫觀客層の間に於て菊地寛よりも有名でない、藤森成吉の原作が斯くの如きポスターヴァリューを有つたといふことは、時たま傾向映畫流行の時潮にケイ眼なる帝キネが、藤森成吉の名前に興行價値を貼り付けて、二重の金儲けを目論だまでの話である。

加ふるに、敏腕の聞ね高い森岡常藏支配人が、新興帝キネいでおろぎい映畫左翼文壇の闘將藤森成吉原作てふ名宣傳文によつて、當時、雨後の筍の如く殖えたマルクス尊奉文學青年、乃至は映畫青年をまんまと釣り込んだと云ふ一九三〇年のモダン淺草ナンセンスなのである。

わが友、松本純一はかつて、エ・ア・デュポンの「ムーラン・ルージュ」に對して莊嚴なる新派悲劇——と云つたことがある。

私も亦、こゝに鈴木重吉の「何が彼女——」に對して——新しくよそはへる莊嚴なる新派悲劇——の尊稱を奉る所以である。

この新派悲劇と云ふことに就いては、岩崎アキラ君も肯定してゐるらしい（映畫往來・四月號參照）但し岩崎君は、も一つ「何が彼女——」に於けるブルジョア社會壞滅の矛盾の新鋭に就いて云つてたられるが。私は敢然が最近見る機會を得た日活の田阪具隆作品「この母を見よ……」はこの點けつして「何が彼女——」に劣るものではないことを附加し作てたく。序でに云つてたくが、前述の「この母を見よ……」もインテリゲンチャの小市民性を描いて一人の若き母親があらゆる社會苦と闘つて遂に自殺するといふ……矢張り一つの「何が彼女をさうさせたか」である。

喰ふ、正腹、妾腹の子二人が家督を定むべく二個甌筮で決を採ると云ふ變つた話其他逆さ文の暗號、誘拐されて行きながら獨龍からこぼす白粉等、一寸意表に出づる手が出てくるがわざとらしさなく語られて居る、これは脚色のいゝせいもあるこの一篇は藥種問屋小西屋の卷と云つてもいゝ、興味本位として見る時たしかにいゝ畫だ

▲一白の人　内にありて怠りなくば福德自ら外より來る

▲二黑の人　思はざる引き立てに逢ふことあり但口舌注意

▲三碧の人　輕卒に走りて思はざる失敗を招く

明日……吉の凶

六月新月　七月十二日　舊曆五月十日

講談　豫告!!!　赤鞘安兵衛

東京　桃川燕二演
村田月光畫

元祿の快舉は、今も尚、人の頭に勇壯な氣分を植付けつゝある將來も永遠に快舉は勇壯な氣分の源泉となるであらう、其の四十七士中曲折多樣にして變遷の運命の奇なるものは堀部安兵衛武庸にしくはない、取分け彼が浪々の身を、三尺二寸の秋水赤鞘に托した時代ほど、勇壯な氣分の横溢したのはないのであつた新講談界の巨星桃川燕二氏此の人物を起して縱横に活躍せしむ、其の昭和の新時代の新味ある讀み口は、讀者の心琴を打つて共鳴を得る事疑ひない更に田村月光畫伯の洗練された麗筆は、紙上に光るであらう（百六十回）

風雲天滿双紙

新進岡田敬監督の千惠藏プロに於ける第一回作品、岡田監督のフレッシュな感觸は特筆すべき處、思ふ存分……。

見給へ!!「何が彼女……」の紛々たる演劇臭を

高病の靈藥
「別府鑛水」
「溫泉エキス」
（アシマイラズ）
山野邊藥局

講談　森嘉膳高山彦九郎

（187）

中西洋々作
市施長春畫

文治の徴（四）

それから後の幾月を、彦九郎はこの森嘉膳の邸にすごす事になりました。

ひこ九郎は、相變らず諸藩士の間を歷訪して裝龜の瑞徴について語り、尊王論の鼓吹に專らつとめました。

と、それは、寛政五年六月始めの或日のことでした。

藩公のもとに、謁すべき人があつて城内に參入しました。

森嘉膳は、程經て愴惶として引き下つて參りました。

「高山殿、一大事にございます」

さういふ辭さいも、並ならぬ變事をもたらしたかのようです。

「とは、また何とせられたのぢや」

ひこ九郎は何となく心の躍るのを覺えながら、問ひかへしました。

「實は、御貴殿御話しの中山正親町の御二方樣が喃」

かういつて、苦しそうに息をのみます。

「やッ！中山卿が何とせられたのぢや」

意外な人の名に、思はずせき込んでたづねかけました。

ひこ九郎は何となく心の躍るのを覺えながら、問ひかへしました。

「實は、御貴殿御話しの中山正親町の御二方樣が喃」

かういつて、苦しそうに息をのみます。

「やッ！中山卿が何とせられたのぢや」

意外な人の名に、思はずせき込んでたづねかけました。

「その御二方樣は、蟄居閉門を仰せつけられたげにございます」

「うゝむ、何とッ！」

ふ彦九郎のうたましさでしたらう。一年前の去年春の出來事だつたのです。

彦九郎らが盟主と仰ぎ尊んでゐた中山前大納言愛親卿と、正親町大納言の二卿は、あらうことか、あるまじい事か江戸將軍家の呼び出しにあつて、京へ下つたのでした、しかも、何といふ憎むべき德川家の態度であらう、さながら、既定の罪人をしらべるやうな峻烈さで尊號宣下の由來及び事情を訊問した揚句、松平越中守の扱ひとあつて前記の二卿に蟄居閉門を命じたのでした。

「たゝ、何といふ憎むべき許し難き彼等の態度であらうか」

彦九郎は、憤然として、座を立ち上りました。

「高山殿、どこへ行かせられる」

それは餘りに悲しい出來れる事でした、彦九郎は、いきなり鐵櫃もて、腦天をぐわんとやられたやうに愕き入りました。

それは、内々恐れて居ることでござる、これより參つて、松平越中の首級を申かうしたこともあるではあるまいかといふ疑ひも、ほんの僅かでしたが彼の心には發狂したのでせうか、かはあつたのです、それを僅ういつて、敢然として玄關かに松平越中守のかねて尊王の念あついといふ世評に安んじて、よもやといふ必のゆるみをもつてゐたのでせ」

嘉膳は、あはてゝ、かけよると、必死の力を以てだきとめました。

「いゝや、た止めあるな、そこ放させられい」

「いゝえ、放しませぬ、高山殿」

嘉膳は、血をしぼるやうな聲をあげて云ひました。

「よう〳〵落着いて思案なれませ、今から江戸へ行つて、どうなりませうか」

嘉膳は、その態度の餘りにもの〳〵しいのにあはてゝ呼びとめました。

「どこへと申して、知れたことでござる、これより參つて、松平越中の首級を申かうしたこともあるではあし受くるのぢや」

あはれ、餘りの恐りに彼の發狂したのでせうか、かつて、松平越中の首級を申かうしたこともあるではあし受くるのぢや」

柳川
相始めました……
御一人前三十五錢
御贔負の程願ひます
石川亭
平田町　電話四三

開業廣告
今般共蝙社ヲ設立左ノ業務ヲ取扱ヘマスニ付御用命ヲ希上マス
金融、土地建物電話其他ノ仲介貸
金ノ取立及賣掛代金整理
家出人ノ捜査婚姻其他ノ身本内偵
本社石城郡平町字十五丁目十三番地
共融社
主幹　元平警察署刑事係部長
青田保太
電話（呼出）八〇四番

生花教授
池ノ坊流　生花を懇切叮寧に御教授いたします、お遊びがてら御出で下れい。
平町五丁目十六番地
須藤なつの

化粧くづれのない
固煉白粉
一　汗で化粧くづれにお困りの方は、是非ホシ美固練白粉をおつけ遊ばせ。
二　ホシ美固練白粉は、化粧くづれのない上にノリ、ノビがよく、化粧榮のする特徴を有つています。
三　このホシ美固練白粉こそ、皆樣の御滿足を購ふことの出來る品でございます。
ホシ美固練白粉
東京　星製藥株式會社　大阪

入院隨意（自炊の便あり）
X光線科
外科專門
平南町
上田外科醫院
電話一二九
病室完備

專門　内科一般
内科ハ何デモ診療致シマス
呼吸器病バカリデハアリマセン
平町南町六五
川井内科診療所
電話七二二番
醫學士　川井重之
女醫　川井安子

營業種目
内地材
材木各種、羽柄材各種
建築諸材請負
礦山用坑木其他諸材請負
外材部
米松、米杉、大角製材調達請負
其他
佐藤材木店
常磐線平町新川町
電話三三五番

平新川町十九
木村病院
電話一六四
産婦人科院長　木村寅次郎
女醫　木村コウ
内臟外科整形外科醫學士　松永憲一
藥局東京藥學士　萩原駿二

夏向の
小供洋服生地と
新柄レース　一寸巾から二尺巾まで
澤山入荷致しました
婦人手藝材料
ハシモトヤ糸店
平町田町

外科一般（入院隨意）
内臟外科專門
花柳病科
平町六丁目（橋際）
木村外科醫院
電話三〇九

〔郵便振替口座仙臺一〇〇〇